



特 別  
ル 3  
3983  
10



143  
3983  
10

東遊記後編卷之五

手取川の風景

南谿子著

極月十二日雪降<sup>ゆきさ</sup>りし如<sup>ごと</sup>く賀<sup>か</sup>玉<sup>たま</sup>小<sup>こ</sup>松<sup>まつ</sup>の城<sup>しろ</sup>下<sup>した</sup>迄<sup>いた</sup>りて安<sup>やす</sup>宅<sup>たく</sup>藤<sup>ふじ</sup>系<sup>けい</sup>  
 ありしに<sup>し</sup>て<sup>は</sup>是<sup>こゝ</sup>に<sup>は</sup>樹<sup>うゑ</sup>の<sup>こゝろ</sup>より<sup>か</sup>り<sup>て</sup>流<sup>なが</sup>る<sup>り</sup>小<sup>こ</sup>松<sup>まつ</sup>より<sup>か</sup>り<sup>て</sup>藤<sup>ふじ</sup>系<sup>けい</sup>今<sup>いま</sup>の  
 松<sup>まつ</sup>系<sup>けい</sup>と<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>彼<sup>そ</sup>の<sup>と</sup>こ<sup>ろ</sup>に<sup>は</sup>盛<sup>さか</sup>つ<sup>た</sup>け<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>あり<sup>し</sup>に<sup>は</sup>け<sup>に</sup>女<sup>め</sup>老<sup>らう</sup>と<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>流<sup>なが</sup>  
 と<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>り<sup>し</sup>に<sup>は</sup>雲<sup>くも</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>口<sup>くち</sup>を<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>來<sup>き</sup>り<sup>し</sup>に<sup>は</sup>流<sup>なが</sup>る<sup>り</sup>小<sup>こ</sup>松<sup>まつ</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>  
 志<sup>こゝろ</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>風<sup>かぜ</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>烈<sup>たけ</sup>し<sup>き</sup>に<sup>は</sup>葉<sup>は</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>小<sup>こ</sup>松<sup>まつ</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>流<sup>なが</sup>る<sup>り</sup>  
 一<sup>いつ</sup>つ<sup>と</sup>も<sup>も</sup>水<sup>みづ</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>か<sup>の</sup>体<sup>てい</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>佐<sup>さ</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>言<sup>こと</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>事<sup>こと</sup>あり<sup>し</sup>に<sup>は</sup>け<sup>に</sup>お<sup>の</sup>り<sup>し</sup>  
 小<sup>こ</sup>松<sup>まつ</sup>系<sup>けい</sup>と<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>水<sup>みづ</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>流<sup>なが</sup>る<sup>り</sup>小<sup>こ</sup>松<sup>まつ</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>流<sup>なが</sup>る<sup>り</sup>小<sup>こ</sup>松<sup>まつ</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>  
 志<sup>こゝろ</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>中<sup>ちゆう</sup>小<sup>せう</sup>七<sup>しち</sup>筋<sup>じん</sup>八<sup>はち</sup>筋<sup>じん</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>流<sup>なが</sup>る<sup>り</sup>下<sup>した</sup>り<sup>し</sup>に<sup>は</sup>雪<sup>ゆき</sup>吹<sup>ふ</sup>き<sup>し</sup>に<sup>は</sup>系<sup>けい</sup>の<sup>と</sup>り<sup>に</sup>流<sup>なが</sup>る<sup>り</sup>



東遊記後編卷之五

<99-1010>

新道(しんみち)をたぬとさむい人(ひと)あしどま(あしどま)きりて(きりて)梅月(うめづき)の  
る(る)は(は)日(ひ)の(の)香(か)の(の)清(せい)く(く)し(し)つ(つ)と(と)あ(あ)ら(ら)ず(ず)か(か)く(く)越(こ)え(え)て(て)は(は)後(ご)  
の(の)中(なか)の(の)人(ひと)勇(ゆう)氣(き)は(は)振(び)り(り)け(け)川(が)を(を)越(こ)え(え)て(て)や(や)る(る)さ(さ)ら(ら)に(に)あ(あ)の  
び(び)り(り)て(て)を(を)飯(い)ふ(ふ)ふ(ふ)食(た)べ(べ)る(る)に(に)禮(らい)合(が)拜(はい)禮(らい)卷(まき)合(が)社(しゃ)合(が)時(とき)と  
こ(こ)重(おも)く(く)着(ち)き(き)扱(あ)り(り)ふ(ふ)風(かぜ)の(の)烈(れつ)愛(あい)を(を)け(け)る(る)こ(こ)の(の)こ(こ)ろ(ろ)香(か)  
ハ(ハ)氷(こ)り(り)て(て)矢(や)の(の)こ(こ)ろ(ろ)下(くだ)り(り)ふ(ふ)洋(やう)橋(きょう)小(せう)路(ろ)の(の)合(が)羽(う)細(こ)切(ぎ)  
神(かみ)役(やく)を(を)て(て)不(ふ)動(どう)の(の)大(だい)笑(えん)乃(の)こ(こ)ろ(ろ)取(と)り(り)ふ(ふ)舞(まひ)の(の)目(め)を(を)開(ひら)く  
屋(い)う(う)ご(ご)息(いき)を(を)け(け)る(る)わ(わ)の(の)風(かぜ)ま(ま)ま(ま)も(も)勇(ゆう)氣(き)は(は)振(び)り(り)て(て)土(つち)橋(はし)八(はち)筋(すぢ)の(の)川  
と(と)く(く)接(つ)ふ(ふ)由(ゆ)小(せう)進(しん)み(み)つ(つ)て(て)表(ひょう)約(やく)の(の)形(かたち)は(は)ん(ん)り(り)ふ(ふ)色(いろ)先(さき)り(り)て(て)今(いま)も(も)死  
す(す)人(ひと)く(く)尺(せふ)ゆ(ゆ)ふ(ふ)是(こ)れ(れ)を(を)け(け)る(る)ま(ま)ま(ま)し(し)つ(つ)と(と)重(おも)く(く)苦(くる)し(し)て(て)既(い)ふ(ふ)川(が)を(を)渡(わた)る(る)

八分(はちぶん)斗(と)を(を)来(き)り(り)福(ふく)小(せう)余(よ)を(を)何(なに)と(と)申(まを)す(す)夏(なつ)の(の)ん(ん)境(が)小(せう)あ(あ)り(り)て(て)さ(さ)も(も)  
佛(ぶつ)さ(さ)の(の)子(こ)舌(した)と(と)動(どう)き(き)こ(こ)ろ(ろ)養(やう)新(しん)を(を)販(はん)す(す)考(こう)と(と)わ(わ)け(け)て(て)本(ほん)京(きやう)  
答(こた)へ(へ)ん(ん)と(と)い(い)ふ(ふ)も(も)存(ぞん)ず(ず)ぬ(ぬ)歩(ほ)り(り)の(の)勢(せい)は(は)い(い)と(と)何(なに)と(と)申(まを)す(す)怪(あや)し(し)め(め)  
養(やう)新(しん)を(を)さ(さ)う(う)し(し)海(うみ)下(くだ)り(り)抱(いだ)き(き)板(いた)を(を)渡(わた)り(り)も(も)志(こころ)す(す)と(と)養(やう)新(しん)を(を)事(こと)  
い(い)ふ(ふ)こ(こ)ろ(ろ)は(は)養(やう)新(しん)を(を)驚(おど)か(か)す(す)と(と)い(い)ふ(ふ)抱(いだ)き(き)し(し)て(て)川(が)を(を)渡(わた)り(り)て(て)小  
者(せう)り(り)十(じゅう)新(しん)斗(と)あ(あ)る(る)業(ごう)家(か)小(せう)あ(あ)り(り)て(て)抱(いだ)き(き)か(か)ら(ら)入(い)り(り)こ(こ)ら  
こ(こ)の(の)ハ(ハ)コ(コ)ロ(ロ)バ(バ)と(と)い(い)ふ(ふ)こ(こ)ろ(ろ)か(か)ら(ら)家(が)の(の)あ(あ)り(り)余(よ)の(の)侍(ざむらい)成(な)り(り)み(み)て(て)  
旅(たび)の(の)人(ひと)又(また)勇(ゆう)氣(き)を(を)倒(たふ)さ(さ)す(す)い(い)たり(たり)や(や)い(い)れ(れ)ば(ば)苦(くる)み(み)成(な)り(り)解(い)けて(て)お(お)の(の)わ(わ)ら(ら)  
一(ひと)と(と)い(い)ふ(ふ)大(だい)に(に)松(まつ)葉(は)を(を)焼(や)く(く)ま(ま)ま(ま)新(しん)を(を)も(も)く(く)小(せう)侍(ざむらい)の(の)余(よ)成(な)り(り)  
今(いま)抱(いだ)き(き)し(し)て(て)時(とき)眼(まなこ)を(を)渡(わた)り(り)き(き)り(り)ふ(ふ)人(ひと)ん(ん)と(と)い(い)ふ(ふ)こ(こ)ろ(ろ)に(に)あ(あ)り(り)し(し)る(る)も(も)

新道(しんみち)をたぬとさむい人(ひと)あしどま(あしどま)きりて(きりて)梅月(うめづき)の

是よりおのちとわたりて、すむ時、むらむらと揺れおつて、  
 朝もすく、驚き、うしろを振りて、抱き、あはれ、あはれ、とわが  
 わり、とて、うしろと抱き、と、難あり、食を、むす、財計、中  
 ちうく、か、い、ま、い、佛、き、を、廻、り、て、け、れ、精、神、を、ほ、ろ、ま、さ、し、た、  
 ま、い、ま、い、の、後、ひ、り、い、ま、い、の、か、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
 は、川、を、ま、り、て、い、ま、い、の、人、毎、年、ま、あ、ら、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
 今、い、ま、い、の、い、ま、い、の、目、だ、た、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
 け、れ、の、所、の、拍、子、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
 後、い、ま、い、の、二、日、餘、還、る、保、美、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、

此の言、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
 ま、り、初、の、初、の、言、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
 い、洗、小、死、と、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
 虚、弱、の、言、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
 か、い、法、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
 恙、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
 伝、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、

床下の聲

越前、越前の、近邊、新庄、村、小、百、姓、の、衆、の、下、に、い、ま、い、  
 ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、

と云ふ床板で引的く見らふにゆくと見ると又床と云ふ人  
おしふ時とにゆきも床の下より早糸す後ま村中の所  
法とありゆき共毎夜大勢あり集り色くの事といふ  
小笠く床の下おてと早糸とより早のまに古狸びり  
といひ狸ふとのふすといふ然る折ちるぐといふは折も  
わづとといふ猫うといふおれすといふ麴に糸糸麴麴  
かこ色くの衣衣おしふ何とて同おしはきものわづ  
わづ言小枝くハちのまにやと解きりぐといひ小枝り解  
解ちりといふとよまがと解化物と異名として生を  
大評判小成きりけ申城りおせしむれが奇怪のゆなりとて

吟味の役人大勢あり一夜は家も居なく試らふ何の夢もた  
役人ゆきとて折夜に又おわつてい流くのゆめおしき後と  
毎夜役人ありしゆ其身おる夜もま度とむとさす故  
おせんてあててさ申小折をりまを月ぐりてさばち  
何のゆめをけり怪事ハ止まらり何のゆめといふとも  
をいりてささりといふとも無くおのつらゆりぬ

飛根の味

出羽新田城の東邊既小津地小をさし取小橋飛根を  
といふ所のりけ遠津地境界よりおまて山の深川の流  
頗る要害の飛取ありゆき小此をさしおさるすして或る

川とあふ交或々あふおあし或は教皇一帯小尺とくく一はご  
 皆心のとあ平として古傳の記最甚と傳きり懸きども代取の  
 城治小尺として地面を廣大にして十町亦十町小連きり或は中  
 小一山とく四面ハ山の邊境のこく然るるあり或ハ心連で居地  
 して或は通河の道と開きりありありハ行きて皆と平す  
 く人懸そと或行すうしたるりのこ玉粒の心の邊ハわら  
 といわたりもそ何人乃城治少々ともり小知との言し又古書  
 傳記もといわたり小かく廣大の城郭と挿人住たり人とす  
 うとむ記がよふと古傳夷と伝しく徳府と傳しやうも  
 見えん何れもさしん力と夢したるる豊臣太閤さとの千

倍やとあふ日本古今いやくと人てすを格千りふと古の世  
 番夷の位たり射彼人小格方の豪傑のそかくのこくさのそ  
 なきくいゆしと車の御う博物のく小尺とい考する所とわ  
 らんや是と人のゆはさるありしがさるさう又は格別小入とて  
 従つ實の心の小尺城治のり是と危根なるのこく一城(一)は  
 前ハ大何と文うり矢倉の記或ハ城門の記をと炭物とゆりて足  
 山は城治と伝ふの名も古城の記格別小大尺は  
 危根のこく教皇小連り四方小くびこまらわらぬ危  
 根小くぬまは十分り一母も足ら守け籠り園ハ人の城治  
 くとく取の考ふ及らふ是と何人いよこく瓜智志は

取の人も只城に計えたり今ふ土中より古刀槍等種々の  
兵器と垢物と事多しとありたりは後小三百年の五百年小  
はごごうん事成文華をさしむとい書傳ふる人ともそくあり  
あり事しと云

舍利溪

奥州外瀨小ホロギといふあり此海邊小舍利溪の  
小石浜にりぐさ中ホ舍利石まじりて白さわり路色がらわり  
大サ豆のこく米粒のこく明徹滑澤を愛す一此西と通  
り一日天氣は小靄あり一ス溪を小舟り舍利石を  
むらひも樂り回玉渡りの舟杯は舍利石成むらひたき後

すうのりりりけふ奇ならるる此溪の磯を海中小舟さるる間  
注の舍利母なるわをけ舍利母なり常く舍利と聲しそ  
舍利とちくは後小舟のげ古今絶えず此所小舍利多し  
とくま舍利母石水面より舍利母は沈居る遠より見たり  
しけさの滝小粒め海底に没入してまをばまきおけり  
取のりぐさ中より此所小舍利母をて得たりハ頗る絶し  
たしと珍敷なるまは舍利母の沈居るの舍利母ありとて均て  
ゆきりま舍利母の色は青黒く玉の化したりるのこく小  
してま中小米粒のこくま小舍利物あり余たり誠小舟  
ありるなり又此舍利溪のまは舍利といふ所のり式之里む





届きし世の候と瑪瑙候といふは候小入る音な小自然の  
 石門のまも事境ありとも肉凡すな餘瑪瑙石の候あり  
 を常体の名とすまじも凡石と瑪瑙と大に傳奉の程  
 より鶏卵或ハ小ハ蠶豆の如く皆く明徹して赤赤  
 小と結ノ小すうもの之業津屋かといひ又ハ寶石といふ人  
 馬造りする候はハ是元と玉石とく結小見光小きつらうて  
 目眩する計くまらりてふんあうて回りへくと是れは後程よ  
 こハせうひ取て神小入る程小あのかんざり計にほきと長  
 き旅海携りゆりてて毎夜そら思つて人小奥へ系すて携  
 りゆりハ後そらりこかくのごとく候系をく小のあつりハ

守りくを義交に戸杯えのつてみたり小入る年たしも許る  
 ことかろ人等遠地がし道ゆりの取小但マ許る人林  
 する老あり先つてくも地なり

洞山

出羽秋田飲海下より東の方を道てりて十八里の取小  
 所仁といふ所の此行に洞山の戸あり付けりてり務家洞と  
 ありとも入堀入穴の中とシキナイといふ奥原く堀今こ  
 こ入る名寄サハ穀小地産より結入るかり扱殺十町奥原く  
 堀入り世界の風を通りてりおむる色ハ火火寺をもち  
 きてゆり火火寺のふくも亦呼吸の音息たらしまらふ

絶く死をうけぬ事不姓火さゆ可ふ事ハ急不遊海のゆ  
と此事我等事小大考ふ事一一人の死生物の生滅  
の如く死一余とは穴の中不中試んと欲せしども急  
此海十八里其に往來の人者といふと急に穴の中ら金  
石の毒氣のうて他邦の人常々急に別る事ハ急事小  
死する者ありといふ又其急の禁制中旅人ありといふ  
のあり徘徊する事ハ急事一一人の急事一一人の急事  
急に入ると死す事又奥深く洞多くして入ると時  
ら穴の小く下不掘地伏せ風氣廻る中らして幾十丁  
ありとも入ると急事ハ急事一一人の急事一一人の急事

入ると急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事  
用紙新くしし急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事  
す急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事  
の急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事

廣徳寺の門

東部下急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事  
門もあつた又急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事  
急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事  
急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事  
急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事  
急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事  
急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事  
急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事  
急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事  
急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事一一人の急事

他よりいふに後醍醐天皇の書し新嘉坡活とありにけ  
 門の事此熱くはるまじくも八分又あふ書にありけ  
 祿年中東叡山二品法親王の目録草紙を法とせむ  
 かくて廣法寺の事とせむは神輿の内よりけ寺の  
 門と法苑に供奉の人と曰く此寺の名を同とせむと  
 啓しぬはゆふのほは側流おろよ法儀ありてりて廣徳  
 寺の大門に達する由作中まひりりて由てゆきまづ一寺に  
 出入とありたこと。小ありて作ありてゆき法儀用たりし小ま  
 くのたよりより後にはありてのむは門は門達する  
 大工の成就のたはせとてたは門のさす幅もありてくハ

き天傳りとも是令く神は考へてむきふ今又せんく  
 ありと法苑に居るが任心の法儀成りてたふの極  
 及び同儀の二匹まで法儀人極と考へて門のたふ  
 み極のまは極り我々のも極先て日月成りて小成り  
 口法成りてとて又と顧るは極角も天傳りて  
 せむすしよは法苑に極りてん是と大工とててて人達ふ  
 てありて門のたふ法成りてたふと極ふと極ふと極ふ  
 業ふと極りて門のたふ法成りてたふと極ふと極ふと極ふ  
 いくわく法苑に極りてたふ法成りてたふと極ふと極ふと極ふ  
 及ぶの事とて極りてたふ法成りてたふと極ふと極ふと極ふ

猶くくそんの中小快くははひ小病とらり既も死せんとして  
志ろくのまゝ子に傳り親友も後生事出まがらつひて後う  
ぬとそそ色ゆゑん人々仲万由ては漢の規範として後う傳人  
中事んを世に傳と色色行事も然りて此の或ハ堂塔或  
は橋塔皆化所あり有る事とてわくはくはくはくはくはくは  
烟片ふふひて皆くはくは法親事よりたよりとて有る事よ  
吾とまあありて居つるふとれといはれしとて志ろく事後漢  
少はたるとも由あるんといはれし古昔も亦の六内裏造ら  
まゝての耐兼雀のぬ小羅城門と建らまゝは柏多院殿造  
ありては門をくまゝ必しあふて下て被換のふとれを又

成切はれよと勅定ありてゆゑをのふ初彼門造ら果ては遷移を  
く成りて又市邊して朕初也者んてき尺切といひてありき尺  
守切守べらして今守切べらして尺ゆりて作らるは太玉を太  
悲怖して中やうは門を本の門のやう小建合といひてき尺切といひ初  
定ちうと作のまゝふ切ひいてハ常下小使く海らまゝく尺とらふさ  
やうらりてそととらてくといひかゝら難き夜の平ふ尺とらふは  
やうらひてそととら切といひて今守と作らるは初小市邊したうら  
にのらび五す屋とて切ひいぬて守目的程も感しきうぬと  
よぬ帝今切らハ遷移のやうとありてさうが其通とてさうべ  
併り風とてと荒るもハ切倒らりて中もさうものごとく勅をさうぬ



の向きくわりの落度大隅局の依はあふわつて最暖氣の  
 向くを求むるの依は方角ふりて全くききあはせし  
 由る所はいろいろと厚谷とくわも之をふりてちか  
 る事一より又人家不出煙といふものも是袋中のみ用  
 らるる及たやハ天氣書小晴明して風亦清くしては西をふ  
 るとや熱をば地味故地地地のは四時より亦草も是小  
 熱一落葉のれと月生とのころく人家のたすもあは  
 せしとく好まぬと様ふやうに寒花のや梅もはるかに  
 ちかちかあつては咲く寒花とさなふらんりやハ梅も亦く  
 相欄於服内皆寒のら松竹とさなふらふは是もさうしてさ

心深谷高野寺ははるかに水極の際おくらりて水晶窟の  
 こく氷厚きを堅くことむすのく大竹も流といふも皆  
 氷りて車馬水上と性あすけゆ急小足袋靴中々春の二  
 季ハ志がくくともさすづりて火燵のなか守圍旛裏ふ大  
 小して是夜寒小火とたく又九十月のはり春三四月  
 のはまてい毎日毎夜天氣曇りてあつらざりて西海最あり小  
 風まてき小烈後して面沢むく魚うるとは風小村をさし  
 出はるくや夏たまり草木も皆を白くま梅も亦方よ  
 さいふのや竹はくや松と又ま梅のり梅梅桃も亦梅躑躅  
 利木石榴花も皆くは小開くゆき小皆四五月のは小一極小花

雪より梅のあはれをいふと花咲く一節としてふも花と一夜の  
まゆの梅はあはれをいふと花咲く一節としてふも花と一夜の  
氣候のお遠くのごとくもいふも花と一夜の氣候のお遠く  
あはれをいふと花咲く一節としてふも花と一夜の氣候のお遠く  
巖石堅固なるゆゑ山嶽おこしてその峰えは山嶽にして  
海を隔て越中を立心の仲お通きり海ありといふ百尋の深  
小入るもよも越中を立心の仲お通きり海ありといふ百尋の深  
ゆゑ土床小骨をいふと花咲く一節としてふも花と一夜の  
さるるもいふと花咲く一節としてふも花と一夜の氣候のお遠く  
海深きゆゑをいふと花咲く一節としてふも花と一夜の氣候のお遠く

日本の内にて南方の山は平穏して巖石も樹木茂りて土地  
はたかくのごとくもいふと花咲く一節としてふも花と一夜の  
風のよきなり海潮の波も山の方のもの小憚りのきなり  
おまひあるゆゑの山方より掃きて南方小あり只中部の地は四  
時的气候なりしは終る中和のきなりと文のく別業の偏なり  
万物いふもいふと花咲く一節としてふも花と一夜の氣候のお遠く

名山論

余知らず山水と好み作那の人小きるは必る大川と申す皆  
各々をいふと花咲く一節としてふも花と一夜の氣候のお遠く  
既小天下にめぐりていふも花と一夜の氣候のお遠く

于武勇一とて又餘瀆なり。其次八如雲の白鳥なり。其次中  
 の立止甚夜日向の勢海山肥前の雲山嶽信濃の約嶽土羽  
 の多海山月山奥州の岩城山岩鷲山は小次と豊前の荒  
 山肥後の河蘇山同云久任山其後の焼嶽嶽摩の海山嶽伊  
 豫のその峯義濃の惠那嶽中嶽近江の伊吹山其後の妙る  
 山信濃の戸尾山甲斐の地嶽常陸の筑波山奥州の音田  
 山内羽嶽嶽等々は皆極く海とらふ不定伯耆の大山上野の  
 妙義山は余のまごごととす其の他は知らず土羽の羽子山の  
 ことしつゝはあつたことなり。山は皆一郡の勢なり。山は  
 なることなり。湯原山も處にあり。山は皆一郡の勢なり。山は

の代ゆゑ小義濃の者なることなり。其の山は皆一郡の勢なり。山は  
 して嶽嶽画のこゝにりりり中立山の劔峯小嶽とれどこの  
 山は皆一郡の勢なり。山は皆一郡の勢なり。山は皆一郡の勢なり。山は





るら由系義經主後の堯の耕形と今小傳くところより以後  
は余彼をこの人小傳く小堯の耕形より大すして後小  
て傳り尤丈まらるむといふことしハ堯小まきもの小わら余  
傳りこの考する小日本神代の此の耕他の具なるべし一國  
たら而とあるの多小傳く田細と耕とあるべしとす  
是後せ小まらるる人版世智しくくあり耕他もせりく  
り便利なるの伝考あり其のいと少くありとす  
本の柄と付て今の耕となせりりるべし今の耕も本の柄  
とあり持さハ耕形より多之耕他才一の具として今飲食  
の根本とせりりるの由系小傳りの神代のよりなることハ世と

をる實として昔より後夷人のたむくことありハ  
初とどうり日本人の業とすあり昔とあり後とあり  
之を平計と傳りハ傳り今小まらるる物とあり居るる人ハ  
昔より田細かく耕他をさるる田は其の業なる耕の事由り  
いふことあり昔とあり而今小傳り居るる日ハ耕他の  
形も亦今の耕の如き便利なるるを考へて後ハ不便  
利なる大昔の耕ハ皆追ふ小あり今ハスキ耕といひ  
たも由り昔の耕ハ日本より小まらるる居るる人より  
人ハ日本ハ其の神代のごとくかましたることを傳り  
傳り日本ハ其の古の伝傳りるる教百千年持傳りるる

居る刀劔の具日身汗の形或も前庭の漆塗をくちを秘  
授して室おとす居る是皆日本古代の御おとすを  
小幡地へ付くたる依今小幡重し居るもの之振素衣眼をくちを  
形取して作られたるもの成又満州鞆組地り候り来るたるお  
ものいざど日本より晋州吉地へ入る依今又墨玉一母り再ひ日  
本とてまゐる事なり是等の形を考へ今も小幡をくち目  
か神代の耕作の道々なるもの疑ふべし守相美人のいざる依ふ  
く海とておとすをくち目とていざる或も人々を舞臺へ又り飛ぶ  
遊とすたる付るおとす二お或もくち目四おとす深の形をくち目  
とておとす與へくち目びる事なりいざるなる派とてと實ある人

出をい一命と助りくち目と保つ事なりいざる依ふおとすを  
或愛するくち目申小かかの楸走をい持つて入る依も賑夷地よ  
形とて明白小おとす又格をい小おとすの愛おのりいざるいお  
と持する依もいおの頼とて作る依の依小派傍ふるものい  
いおとすなり

地氣

天下太平の氣いゆるりして重をい今うを地百ありま那古  
氣備して親者の舞臺小おとす眼中とて小前より方総の酒  
く西ハ伊豆の岬まで月をくち目後一をくち目白うりまは好く  
居してから免居たり小雨の老く傷小ありく四方心の形

とふまき老人いふやうにねと天北は不思議なるものなり其初  
時より毎日の舞臺小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
と海より揺り小舟と揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
一々めいし陸地より揺りて揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
ぞう尺の大海より十十計も揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
いふけゆるりゆと海より揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
くねまひ海より揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
時小揚洲なる小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
るふと海より揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
そくと海より揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り

とふまき老人いふやうにねと天北は不思議なるものなり其初  
時より毎日の舞臺小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
と海より揺り小舟と揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
一々めいし陸地より揺りて揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
ぞう尺の大海より十十計も揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
いふけゆるりゆと海より揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
くねまひ海より揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
時小揚洲なる小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
るふと海より揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り  
そくと海より揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り小舟に揺り



書肆

東都

須原屋茂兵衛

同 伊 八

山城屋佐兵衛

岡田屋嘉七

大坂

敦賀屋九兵衛

秋田屋太右衛門

京都

勝村治右衛門板

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '東都' and '卷之五']*

